

男のケア ― 男性の職場としての保育園

Lars Maanum and Tommie nilsen

「男性の職場としての保育園」プロジェクトは、「保育園における男性の問題」プロジェクトの延長線上にある。Tommie nilsen と Lars Maanum も参加していた。このイニシアティブは、1991 年から 1992 年の間 Søndre Nordstrand 専門家チームの Ole Ivar Brørs によって取られていた。しかしながら、プロジェクトリーダーが辞めてしまったためにそのプロジェクトは完結しなかった。

私たちの研究の出発点は、二人共保育園がいかに注目すべき職場であるのかを示したいと思ったことである。

我々はそれぞれ 23 年と 12 年という長い間、この仕事に光を当てたいという強い願望を持ち続けていた。そして、二人共が、今後もこの仕事を続けていくつもりである。すなわち他の男性が彼らのキャリアや職業決定をしなければならないといった状況のとき「ことによるとこれが自分にとって何か関係するかもしれない」と考えることができるような方法で自分たちの仕事を紹介したいのである。

またここで、子どもの成長、養育、「良質な幼児期」（「保育園要項」中の提案を参照） というようなことに関心を持つに至った動機について付け加えなければならない。

今日の幼児期をみると、ほとんどの子どもが施設に入る。これは深刻な事だと確信している。もしそれについて何かがなされるべきだとするならば、意識的により多く男性を保育園に雇う努力をすべきである。男性が子どもの成長に関して多くの援助をすべきである。我々は子どもを成長させるという言葉で、ケア、養育、遊びと学習を意味している。

成長過程における私たち自身の体験が大人となった時の自分にいかに影響するのかということに我々は関心を持っている。そして、何がどのように影響するのか。振る舞い、社会的な態度、価値観や自然観。保育園で働く多くの人々は現代の傾向とは異なった成長をしてきた。保育園に行かなかったかもしれないし、大人の監督や管理から離れた様な成長をしてきたかもしれない。

成長 ― 昨今

どのように我々が成長してきたかを回顧する時に重要なことは、その過程には「先生」と

なる年長の男子や女子がいて、その子たちが我々の周りにある可能性のすべてを示してくれたことである。草地や隠れ家の庭や「私たちの森」と呼んでいた自宅から 50 メートルの所にあった至る所は、活動する場であった。それらは、我々のすべてを欠点と共に引き受けた。学習意欲は飽くことを知らず、そして、その過程自身が重要である点からすれば、我々の学習能力はきわめて優れたものだった。すべてのものが征服されなければならなかった。家庭は安全な場所で、偉大な征服者、探検者としてその世界に出発する前に何かを食べ、そして世話をしてもらう所だった。

今日、我々は成長期の自分自身の経験が、大人になった時にとる行為や社会的な態度、価値観や自然観にどんな影響を与え、何が我々の興味をかきたてるかということに関心を持っている。

保育園で働く多くの人々は、今保育園に通っている子どもたちとは異なった成長体験をしてきている。保育園に通わなかった人もいるだろうし、大人の監督や管理からはほとんど無縁に成長してきたかもしれない。

今、社会において、子どもの生活には多くのギャップがある。例えば家族間や世代間において。最も深刻な一例として、就学前の子どもと 7 歳～12 歳の子どもとのギャップがある。大人は現代の子ども文化における 7 歳～12 歳のよう、良い教育者には決してなれないだろう。子ども文化と生活技術は常に力とアイデンティティを伴って子どもから子どもに順に手渡されるものである。これは、絶え間ない状況変化の中で新しい事柄が獲得される一方、消えていくものもある。異なった年齢の子どもたちが共に過ごす時間は益々少なくなっている。

我々はこのことによる結果を恐れている。もし子どもからこの機会を取り上げてしまうなら、それはすなわち、最も重要な生活技術をお互いに教えあうというチャンスを我々が取り上げるということになる。

今日の多くの大人は、自分たちが遊んだ場所で、どうして今の子は遊ばないのかという疑問をもつ。100 メートル先の森に何が起きているのか。そこでは、今でもまだ、遠い日から生い茂りすぎた小道がみつけられるだろう。

理由としては、今日の 7 歳から 12 歳の子どもたちは、ほとんど保育園に通った子で、また、少数の他の子と一緒に、あるいはほとんど母親だけといった状態ですごしてきたためであると考えられる。我々のみるかぎり、保育園では子どもの生活能力の指導にあまりにも注意が払われていないといえる。

大人によって導かれ、監督され、管理される今日の成長

これは、施設としての保育園に対し重大な課題を投げかけている。保育園で働く大人は、子どもたちに自分が子どもだった時の良い経験を仕事の中でどう伝達すればよいのか。近頃の保育園には初雪が降ってきた時に雪の中でどうするかわからない子どもたちが多い。

我々がどんな子どもたちに育てたいかを考える時、どういう大人に子どもたちを接触させたいかを考える。子どもたちにどんな経験を伝達して欲しいか。

保育園に通わなかった人は、誰でも雪だるまの作り方や雪の中での遊び方を誰かに教えてもらったのである。我々は子どもと共に雪の中で遊び回って、子どもたちにどうしたら良いのかを示し、共に何かを経験する大人を望んでいる。彼ら自身の子どもの時のやり方に密接につなげ、子どもにこれを示すことのできる大人は、子どもたちにとって魅力的な遊び相手と評される。

自分の子どもの時のやり方と密接につなげると同時に、明らかに大人であることとのバランスをとる大人が、私たちの考える子どもの良い養育者で、教育者である。同じ年齢の子たちの所に出入りできることは、そこでの経験だけではなく、その問題では年長の子たちに教育役割を認める資格を与えることになる。

我々は、共同の経験や子どもたちと共に新しいものを創造することに興味を持てる大人を望む。所定の時間で忙しい彼らが、子どもたちとの関係において、ユニークな興味や関わりや好奇心を持っているべきだろう。これは、子どもに我々が子どもとして経験した何らかの同じ自由の意識を与えることができる。

それは、保育園の構造やその可能性の中でそれぞれの子どもたちに与えて欲しい自由の意識である。我々にとって、それは責任を伴った自由で大人の関与を必要とする。

望ましい大人

我々が考える望ましい大人の特徴である5つの点を述べる。

Berit Bae は、保育園における主要な問題の1つである大人の不在について指摘している。このことで彼女が意味する事は何であろう。彼女は、「子どもの経験に非常によく通じている大人を子どもが必要としている」と言う。今日、我々はモデルのない親の世代と関わっている。今時の親は、自分たちの親から受け継いだ養育の仕方を我が子にすすんで与えることができない。

子どもたちは習得することを通して学ぶ。彼らは生活を通して、成功したい、達成すべき目的を持ちたいという激しい欲求に満たされる。子どもとの正しい関係づくりを心配し、子どももまた、この感情を経験できるような方法で子どもの魅力を分かちあうのは、保育

園で働く私たちだろうか。

これらは以下のような特質を備えた大人である

ぬくもりに対する子どもの要求を満足させる。

このような人は、子どもが意気消沈して、仕事を続けるためには慰めや支援や激励を必要とする時がわかってあげられる大人である。彼らは子どもをひざの上に乗せるべき時—子どもの生活や友人関係がうまくいかない時がわかる。

何かを習得したいという子どもの要求がわかる。

子どもが懸命に努力するものは成功し成し遂げるべきであるということに関心を向けられる人である。子どもたちは努力や自分たちがしていることに対し、尊敬や賞賛を与えてくれる大人を必要としている。

子どもに寄り添う大人が子どもの発想を理解できる。

早くから我々は、いかに役割モデルのない親の世代であるかということ、しかも子どもは役割モデルを必要とするという点について議論してきた。彼らは尊敬できる確かなやり方で行動し、振る舞う大人のヒーローを必要としている。その結果として、子どもが“大きくなったら、自分もああいうふうになりたい”と考えられる大人を。

喜んで努力し、子どもの可能性を認める。

保育園や学校には努力を要する多くの子どもたちがいる。彼らは、しばしば社会的に無責任で逸脱した行動をする子どもたちである。

これらの子どもたちは社会的に受け入れられる行動の方法を学ぶ分岐点で、正しく曲がれるように一生懸命関わってくれる大人を必要とする。子どもたちは暮らしの中で、非常に多くの悪いことや危険なことをしてきており、このように関わるという選択をすることはしばしば難しく、厄介な道となる。

子どもの振る舞いに対して大人として耐える。

我々は、子どもたちの行動に関する問題の多くは、うまく処理することが出来ない選択に直面したことから生じると考えている。これはまた、大人が「だめ」と言っても、子どもがわめきたてたり、殴ったり、十分に泣きじゃくったり、叫んだりすると、すぐその後に「いいよ」ということを子どもたちが非常に良くわかっているためである。

我々の結論

子どもたちが何を学ぶべきかを決定する時、これは、大人が子どもと一緒にいる時どんな対応をしたら良いかについての結果から導くべきである！

(小林由美)